

主 題：偽教に惑わされるな7

聖書箇所：コロサイ人への手紙 2章18－23節

このような質問をよく耳にします。私は救われているかどうか分からない、また、私はどうすれば信仰が成長するのでしょうか？と。実はこのような質問を同じ人から何度も聞くことがあります。確かに、私たちの日々の生活において、私たちを惑わすものはたくさんあります。でも、もし、自らの信仰に疑問を抱くようなことがあったり、自分の成長に対して疑問をもつようなことがある場合、どうすればいいのか、聖書に戻ることです。みことばに戻ることです。なぜなら、救いを与えてくださるのは神です。それなら、その神が私たちに与えてくださった聖書に戻ればいいのです。神がどうすればたましいの救いを得ることができるのかを教えてください。また、成長に関しても、成長を与えてくださるのは神です。その方がどうすれば信仰の成長を得ることができるのかを教えてください。だから、それが記されている神のおことばに私たちは耳を傾ければそれでいいのです。みことばの教えにしっかり立ちなさい、聖書にしっかり立ちなさい、人間の考えや人間の教えではなく、神の教えに神のおことばに立つことです。パウロは私たちに偽りの教えに惑わされてはならないと警告し続けてきました。彼は三つの偽りの教えを上げて、このような教えに振り回されてはならない、心を奪われてはならないと警告し続けるのです。

☆偽りの教え

1. 律法主義

前回見たように、その一つ目は律法主義でした。つまり、旧約聖書に記されている様々な律法を守り行なうことが、救いには必要であると彼らは教えたのです。イエスを信じるだけでは不十分であって、食べ物に関しても、飲み物に関しても、祭りに関しても、特別な日に関しても、そういう日を守ることがあなたを救いへと導くのだと言います。しかし、パウロはそれは違う、イエス・キリストを信じる信仰によって救われるのであって、そのような律法はすべて影である、律法があなたにしたことは、あなたには救いが必要であると示してくれた、しかし、そこまで律法は救いをもたらすことはできなかったと教えたのです。影ではない実体が現われた、救い主が来てくださった、その方は私たちに救いが必要だと示すだけでなく、実際に救いを与えてくださる、イエス・キリストを信じる信仰によって、私たちは完全に永遠にたましいの救い、罪の赦しをいただくのです。ですからパウロは、そのような律法主義の人々がしたことは、この神がくださったすばらしい純粋な救いの恵みのメッセージに混ぜ物をして、その価値を引き下げたと言います。そのような教えに耳を傾けてはならない、惑わされてはならないと教えたのです。今日は二つ目です。

2. 神秘主義 18－19節

18－19節に記されています。「あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによつて誇りに誇り、：19 かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。」。パウロはここで、この神秘主義者について彼らの特徴を挙げています。

1) 神秘主義者の特徴

(1) ことさらに自己卑下をする 18節

どのような人でしょうか？ここで使われていることばは、その考えが謙虚であるということばなのですが、この箇所をよく見ると、パウロが言いたかったのはそういうことではなくて、実は、この人たちはわざとらしい見せ掛けの謙遜者たちであるということです。だから、日本語の聖書でも「ことさらに」ということばを付け加えています。「わざと、故意に」という意味です。自己卑下する人々、つまり、へりくだる人々だということです。まず最初にパウロが言った、神秘主義者がどういう特徴をもった人かという、見かけは非常に謙遜だけれど心は全くそうではない、心は全くその逆なのです。非常にプライドがある、高ぶっているのです。自分自身のことを自慢しているのです。自分が謙遜だということを喜びとして、そのことを自慢しているような人です。何に対してそうなのか、そのことはこの後、パウロは私たちに教えてください。このような人々が巧妙に教会に入り込んで来たのでしょうか。行ないだけを見ていると非常に謙遜なのです。そうすると、人々はその人たちの教えに耳を傾けるのですが、実は、彼らはほとんどもないことを教えたのです。

(2) 御使いを礼拝する 18節

彼らは天使を崇拝したのです。ご存じのようにこれは大きな罪です。黙示録22章で、ヨハネが様々なことを示してくれた御使いの足元にひれ伏して、彼を崇拝しようとしたときに、御使いがヨハネに対して言ったことはこういうことでした。22:9「すると、彼は私に言った。「やめなさい。私は、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書のことばを堅く守る人々と同じしもべです。神を拝みなさい。」と、天使がヨハネに教えたことは、神だけを崇拝しなさい、創造主だけを崇拝しなさい、それ以外のものを崇拝することは神に対しての偶像礼拝の罪であるということです。皆さん、覚えていただきたいことは、神秘主義者たちは天使を崇拝していたということです。神が造られた天使の中で最も美しく、最も知恵のあった天使、それはサタンです。彼は神のように人々から崇拝されることを望みました。彼は神のようになろうとしたのです。そうすると彼は、本来なら創造主のみ向けられるべき人々からの崇拝を、自分に向けようとするのです。そこで天使崇拝や、ありとあらゆる神以外のものを崇拝するということが起こりますが、その行為の背後に存在するのが誰なのかは明らかです。サタンがしたいことは、みな創造主のほうに向かないことです。創造主を信じてその創造主を崇拝しないことです。神でないものを神として崇拝するようにサタンは誘惑するのです。そして、この神秘主義者たちは明らかに天使を崇拝する人々であったとパウロは教えるのです。

(3) 幻を見たことに安住していた 18節

幻とは、特別な超自然的な経験、体験です。自分たちの見たことを細かく調べたのです。つまり、この人々は聖書を調べたのではなく、自分たちが見たこと、経験したこと、体験したことに関心をもって、そのようなことに心を開いて行ったのです。そういうことを言っているのです。皆さん、このような動き、つまり、聖書ではなくて経験や体験に重きを置くような動きというのは、キリスト教の歴史の中で繰り返されています。この日本でも1980年から90年にかけて、第三の波とか、力の伝道と呼ばれるような聖霊運動が入り込んできました。その指導者の一人は、アメリカ、カリフォルニア、ロサンゼルス牧会者であるジョン・ウィンバーという人ですが、この人が書いた「力の伝道」という本、これは多くの人々に影響を与えました。どのようなことを彼が記したのか、このように記しています。これは「混迷するキリスト教」の中からの抜粋ですが、「第三の波は劇的なしるしや不思議がこの運動の神性を示すと言う。奇蹟的現象が第三の波の信条の核心である。第三の波は奇蹟、幻、異言、預言、癒しが福音に必須の付加と確信する。これらを伴わないキリスト教は不能であり、西洋的な物質主義的意向に毒されたものと見る。」と。彼が言ったことは、劇的なしるしや不思議が必要だということです。考えていただきたいことは、それは聖書の教えでしょうか？そのようなことを聖書は言っているのでしょうか？また、彼は同じようにこんなことを言っています。「しるしと不思議は第三の波伝道の鍵だ。ある第三の波は、未信者が十分な信仰を持つには奇蹟的なことを体験する必要があるとさえ言う。単なる福音のメッセージを語ることで決して世界をキリストに至らせることはできないと言う。彼らは『たいていの人々は奇蹟を見ずに信じることはない』『見ないで信じる人は回心が不適切で、霊的成長が止まる』と言う。」。奇蹟的なことを体験しなければその人の信仰はおかしいというのです。奇蹟を見ないでは人は信じないというのです。こういうことを聖書が教えているかどうか考えてみてください。また、彼らは聖書の充足性を否定します。聖書だけで十分だという考えを否定するのです。彼らは神は今日も教会に新しい啓示を与えていると教えているのです。聖書はまだ完成していない、まだ神の啓示がたくさんあると言うのです。そんなことを聖書が教えているのでしょうか？

ジャック・ディアーという一人の牧師は、この運動の中で非常に大きな役割を占める神学者の一人です。彼はもともと牧師でありダラス神学校で教鞭をとっていた人物です。この人物がこの第三の波運動の神学的指導者の一人となりました。彼が1990年にシドニーで行なわれた「霊的戦い会議」において配った印刷物には次のようなことが記されています。「私たちの人生に対する神の最高の計画を成就するためには、書かれたことばと天から新たに語られるみことばの両方から神の声を聞くことができなければならない。」と、私たちが手にしている聖書にプラス、天から新たに語られることばの両方から神の声を聞かなければならないと言うのです。彼は聖書の充足性の教理は悪魔的だと言います。このような考え方がこの日本にも入り込んできて、このような考え方を信じている著名な牧師、宣教師、神学者がたくさんいるのです。このような本がどんどん翻訳され出版されて本屋に並んでいるのです。信じられないことと思われるかもしれませんが、これが現実です。クリスチャン新聞を見ると、このような運動の広告がいっぱい出ています。「リバイバル甲子園ミッション」というのがかなり前に甲子園で行なわれました。たくさんの方がその働きに加わりました。私たちは加わらないと皆さんに話しました。なぜなら、こういう考え方の影響を受けているからです。聖書だけでは不十分だ、何か特別な体験をしなければいけないと、そういうものを人々はどんどん追い求めるようになって行くと、今そうなっています。パウロが言った、この教会に入り込んで人々を惑わしていたこのような偽りの教師たち、彼らの関心はみことばではありませんでした。

(4) 肉の思いによっていたずらに誇り 18節

肉、罪の性質です。彼らの自慢はそういう肉の思いでしかなかったのです。彼らは自慢し合っていたのです。どんな体験をしたか、どんな経験をしたかと…。ですから、こういう教師たちに共通していたことは、見かけは謙遜だったかもしれない、しかし、心の中は、人を見下していたり、高慢な心の態度があったのです。シカゴのムーディー教会の牧師であったウォーレン・ワーズビーはこのようなことを言っています。「真の礼拝は常に人を謙虚にする」と。そう思われませんか？私たちが神の前に立つとき神が私たちに為されることは、私たちの醜さをこれでもかというほど示されます。私たちは神の前に立つとき、なぜこんな者が神によって生かされているのだろう、なぜこんなものを神はここまで愛をもって扱ってくださっているのだろうと、驚かされることばかりです。神のみことばを通して私たちは自らの罪深さに気付かされて行きます。そのとき、私たちはいったい神の前で何を誇りとするのだろうと思います。なぜなら、自分の本当の姿を見、神がどのようなお方であるかが分かるほどに、私たちがこれまで誇ってきたものがいかに空しいものであるかということが明らかになります。私たちの財産など神の前では空しいものです。それは永久に続くものでもない、私たちの仕事もあつという間に終わってしまいます。私たちの持ち物しても、学歴にしても、みなはかないものです。一時的な、あつという間に過ぎ去ってしまうものです。パウロは神の前に立つときに、神がどんなに偉大な方であるかを教えられるたびに、このお方に対する畏れというものが彼の心の中に芽生え、そして、それが強くなって行きました。そして、彼自身が神を知れば知るほど、自分がいかに罪深い者であるかが示されて、私は罪人のかしらだと心から叫ばずにはおれなかったです。そして、彼はそこで止まらず、神さま、どうしてこんな罪人のかしらをここまで愛してくださるのですかと、彼の心の中には神への感謝と愛に満たされるのです。そして、同時にパウロは、どのようにして神に私の感謝を現わして行こうかと、それは彼の意志に働いて行動に出て行ったのです。神のために一生懸命生きたのです。忠実に神に仕えたのです。

ですから、神の前に正しく立つ者、神を正しく知っている者は、間違いなく神によってより謙虚にされて行きます。これまで誇ってきたことが全く空しいものだと思われかされることによって、誇るはただキリストの十字架とパウロが言ったように、まさにそのような者に私たちは変えられて行きます。ところが、この神秘主義者たちは自らの体験など自分のことばかり自慢するのです。本当に自慢しなければいけないのは神です。肉の思いによっていたずらに誇っていた、そのような者だったと言うのです。

(5) かしらに堅く結びつくことをしない 19節

かしらとはキリストのことです。キリストの方に、神の方に行こうとしないのです。もちろん、今見て来たように、彼らの関心は神のおことばではなくて、彼ら自身が経験し、体験したことです。だから、彼らは真理に到達することがないのです。彼らの致命的な問題はすべての源であるキリストに結びつくこととしないことです。キリストを離れて生きようとする、だから、彼らには救いも、また、成長もないのは当然のことです。枝が幹から離れて生きることができないように、私たちも頭から離れたからだがそれだけで生きることができないのです。ジョン・マッカーサー先生がこのようなことを言われます。「人間の性質には客観性から主観性に移行するという傾向がある」と。私たちが客観的に物事を見ることができずばらしいです。すべてのことに対してそれがほんとうに神のわざなのか、何が神に喜ばれるのか、客観的に見ることができずば…。しかし、私たちはいろいろなことを通して主観的に見てしまいます。他の人がどう思うかとか、聖書がたとえどう言おうとも、私が経験した、私が体験したから…と、このようなことはたくさんあります。私たちも気を付けなければ、これは神に喜ばれることかどうか、これは神のみことばかどうかと、客観的に吟味できなくなってしまいます。神はみことばを通して私たちにみことばを示されます。マッカーサー先生は「混迷の中のキリスト教」の中で「カリスマ運動は主として霊的成熟の近道を約束することで成長して来た。カリスマ運動の最大の魅力は常に信者に力や理解、霊性が体験により直ちに得られ、通常の成長プロセスに付き物の時間や苦しみや戦いは不要であるということだった。」と記しています。すぐに成長しますよ、すぐに霊的におとなになりますよと、そのように言うなら皆関心を示します。信仰の成長には時間がかかります。それはいやだという人には好都合です。そして、人々はそのような体験に走って行くのです。癒しや異言に関心を示して、それらがみことばよりも重要になって行くのです。約2000年前にこのようなことをパウロは警告しました。神秘主義者たちがいろいろな方法をもって、人々がみことばから離れるようにしましたが、今この日本でも同じことを見るのです。私たちの周りでそのようなことがまさに行なわれているのです。かしらに堅く結びつくことをしないのです。

キリストにしっかり結びつくことによってすべてが始まるのです。救いもそこから始まります。成長もそこから始まります。ヨハネの福音書15：1-5でイエスはこのように教えられました。「わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。：2 わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。：3 あなたがたは、わたしがあ

あなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。:4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。:5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」と、イエスが言われたように、私たちがたましいの救いをいただくために必要なのは、この救い主であるイエス・キリストにつながることです。枝だけがあってもそれが幹につながっていなければ栄養をもらえないから、実を結ぶことができないように、私たちが神の祝福をいただくためには、神に、キリストにつながらなければいけないのです。イエス・キリストを救い主として受け入れるその信仰によって、私たちはキリストとつながるのです。罪が赦されるのです。そして、罪が赦された私たちはこのキリストにつながり続けて行くのです。

19節の後半にこのようにあります。「このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。」と、パウロはかしらであるキリストに結びつくことによって、その人の信仰は成長すると言います。ところが、このような神秘主義者たちは、人々が成長するのに必要な神のおことばに目を向けないように、みことばから離れるようにと誘惑をしたのです。私たちが成長して行くために必要なのは聖書だということは皆さんご存じです。神は、私たちの信仰の成長に必要な二つのものを与えてくれています。一つは聖書のみことばです。Ⅱテモテ3:15-17にそのことが記されています。「:15 また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。」と、パウロは聖書は救いを与えると云います。聖書をしっかり見ることによって、私たちは救いを得ることができると。そして、このテモテは幼い頃から聖書に親しんで来たこと、すばらしいことです。「:16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」と私たちの成長のために有益だと言い、17節には「それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」とあります。ペテロもⅠペテロ2:2で「生まれただけの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」と言ったように、確かに、みことばは私たち信じる者に救いを与え、みことばに従う者に成長をもたらすのです。そのことをパウロもペテロも私たちに教えてくれるのです。

ですから、神は私たちの成長に必要なものはもう備えてくださっているのです。みことばを学ぶ度に私たちはどのように歩んで行けばよいのかを神によって示されます。そして、感謝なことにそれを実践して行く力も神は備えてくださった、聖霊なる神を私たちのうちに与えてくださったのです。そうすると、私たちの信仰が成長するために必要な神のおことばが与えられ、それを実践するために必要な力である聖霊なる神が与えられています。そして、もう一つ必要です。それは、私たち自身がそのことを望むことです。あるクリスチャンたちは、神が私の心を変えることができるなら変えてみなさいと、そのような態度をとっています。神のみことばを学んで神のみこころを知って、そして、神さま、どうぞ私がそのようにしたいと願うように、私の心を変えてくださいと、そのように祈りをするのですが、その前に自分に問いかけなければいけないことは、神の命令に私は従って行きたいかどうかです。私たち自身が選択し決心して、そのように歩んで行く必要があるのです。ところが、全部人任せです。神さま、どうぞそのような気持ちになれるように助けてくださいと…。残されているのは私たち自身の選択です。

2) 神秘主義者の目的

さて、今日、私たちはこの神秘主義者たちのことを見て来ました。彼らは私たちがみことばから離れるように働くと見て来ました。彼らは何が目的なのでしょう？それは、18節の真ん中に「…ほうびをだまし取られてはなりません。」とあります。つまり、彼らの目的というのは、忠実に主に従っているクリスチャンがそのような歩みをしないように、忠実なその歩みを止めるようにと誘惑するのです。クリスチャンの忠実な歩みに対する神の称賛を奪おうとするのです。なぜなら、クリスチャンが忠実に歩むなら神の栄光を現わすから、神のすばらしさが周りに明らかにされて行くからです。だから、クリスチャンが忠実に歩まないようにと働くのです。みことばから外れて他のものに目を向けるようになると、まさにサタンの思うつぼなのです。パウロはⅠテモテ4:1でこのように警告しています。「しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。」と、すでに見て来たように、サタンがしたいことは、私たちが神のみことばから外れるように、神のみことばに従うのではなくて、私たちの常識や一般的な知恵、人間的な考え、また、見たことや体験したことに私たちが関心を向けて行くようにと働くのです。そして、もし私たちが神に忠実に歩むことを止めてしまうなら、彼らの思うつぼになり、私たちは神からのほうびを失うことになってしまうのです。クリスチャンの皆さん、今歩んでおられるように忠実に歩み続けることです。もう、このレースは終わろうとしています。何十年も続きません。今、止めてはならない、今、止まってはな

らないのです。16世紀に宗教改革が起こりました。そのとき、五つの大切なスローガンがありました。その中の一つは「みことばだけ」です。なぜ彼らがそのことを掲げたかという、その当時のカトリック教会は大きな間違いをしていたのです。彼らはクリスチャンの伝統を聖書と同様に権威あるものとしていたのです。そこで、宗教改革者たちはみことばにだけ権威があるのだ、我々は人間の考えや人間の伝統に従うのではなくみことばにだけ従うと、そのようにスローガンを掲げたのです。今の私たちのこの国にも同じことが言えます。私たちがすべきこと、それは神のみことばに戻ることです。私たちの教会にあって、牧師だけでなく教会学校の教師も含めて、教師たちが誓わなければいけないことは、まさにこのことです、みことばだけを伝えるのです。

パウロはⅡコリント2：17で「**私たちは、多くの人のように、神のことばに混ぜ物をして売るようなことはせず、真心から、また神によって、神の御前でキリストにあって語るのです。**」と言いました。神のおことばに混ぜ物はしない、神のおことばに私たちの考えや意見や経験はどうでもいいことです。権威があるのは神のことばだけなのです。人間にも教会にもありません。神のことばだけにあるのです。それが私たちの信仰です。それが私たち教師が神の前に誓わなければならない誓いです。

私の信仰はどうなのでしょう？と、…、みことばに戻ってください。聖書は明確にイエス・キリストを信じる信仰によって救われると教えています。そこに立つことです。私の信仰の成長はどうでしょう？…と、みことばに立つことです。神がくださった神のおことばであるこのみことばをしっかりと学び、聖霊の助けによってそれを実践して行くことです。そのとき、あなたは変えられて行く、あなたが変えられて行くことによって、周りを変えられて行きます。そして、何よりも、私たちを変えてくださっているキリストの栄光が現わされて行きます。このようにして私たちは生きて行くのです。これが神のおことばが教えていることだからです。人間の考えや教え、不思議なわざに目を留めてはならないのです。不思議なわざは悪魔でも為すことができます。私たちが常に吟味すべきこと、その物差しはここにあります。聖書にしっかり立って生きること、それがパウロがこのコロサイの教会の人々に、そして、今の私たちにも語ってくれていることです。感謝なことです、神がみことばをくださったこと、聖霊をくださったことは…。それなら、そのみことばが教えるように歩んで行きましょう。それが神が私たちに期待しておられることだからです。